

― 真神真史 ―

くきやう ねはん まんだら まんじゆしゃげ

究竟涅槃曼荼羅曼珠沙華

しぶや りふかふ

昨朝の淡い雪も乾き、早春の川の土手に生えた短い、さ緑の草の上に、こころからやかに坐っていた。心静かに華やぐ。

北の地方には珍しく、夏の終わりの頃に曼珠沙華が爛々と咲くような場所であった。今は未だ浅雪の春儂き時季であっても艶っぽい残り香のようなものが仄かに観ぜられ、ゆかしく想う。

そよそよと吹くかぜが地衣類の生えた古木のならば狭間を撫でていた。染井吉野のかほりをほのかにまとう。かすれながらも優しい細やかな声で僕がかすかに嘯くと、老樹の神が呼応して、淡い紅色の吹雪が翻った。

あゝ。

爛漫たる桜華、彪やぐ艶姿、花びらの一ひらすら黄金のごとく、咲き誇らかなる絢爛さ、金欄緞子の奢りに高ぶり、驕慢あふれ、妄りに空しと知りつも敢えて婀娜なる姿態にて傾く。散り紊れ逝く儂さですら、繚亂あざとく、妖しくもの狂おしく。世の俗倫理を超絶し、きよらさやかに燦めきて、喻える言葉とてもなし。我が魂魄は歎に躬を裂き、天を翔けりて狂い亂舞す。なすべき全てを成し遂げて、無欠の完璧、究竟に涵り、万象一切を緩やかに眺め、実り充ち満つ妙なる豊穰、細密精緻を噛みしめ舐り、細波すらなき水面の静謐、満月輪のまどかにて、乳に倦み足る子猫のごとく、さぞや愉快快樂と見えるであろうぞ、我が寂莫の微笑の神寂。見上ぐる蒼穹、濃く深く真に青い。

甚深微妙なる法悦のうちにありながら、僕は全く別のことを思っていた。「少年老い易く」云々で始まる朱熹の詩『偶成』の一節で、七歳か、八歳くらいの方に父に命じられて何度も書取りをした詩句、感慨を覚える。幼い頃に読んだ文を大人になっても賞味することには格別な妙味があった。

池塘春草の夢か。池ではなく、今いる場所は河川の堤ではあるけれども。ただし、僕はあの詩句とは全くの逆の状況であった。似て非なるとはこのことである。

「池塘春草夢」とは、言葉のままに解すれば、池の堤の春の草の上に坐って（寝そべって）観る夢のことである。少年らしく未来へと翔ぶ空想を馳せさせている様子であった。しかし、又それは瞬く間に時が過ぎて逝き、毫碌して現実にいる己を眺めずに、夢から覚めぬ（未覚）、哀れ・愚かな様子を言う詩句でもある。しかし、僕は未だ「階前の梧葉、已に秋聲」という齢には程遠かった。時を無駄にしてはならぬという脅迫の固執によってまっ

しぐらに、幼い頃から究竟の真実を求め、求道し、竟に昨日、善逝（修加陀【梵】Sugata）する。

奇しくも新月であつた。

諸卿らが訝しがる気持ちは当然である。しかしながら、故事を鑑み、かつ慮れば、自明の事である。仏陀となりし釈迦牟尼すらも、罹病し、斃れ、普通に死したることを。亡骸となったことを。莊周は眞（道殣）故郷に帰り着けずに行き倒れになった餓死者、横変死した人・非業の屍人）を最高と存在者として、『真人』と指定した。

僕が解脱者であつて、何の違和があるうか。

むしろ、そうでなくては、現実の済度はない。ちなみに、死を肯定せよという主旨ではない。

どんな教説も、いかなる摂理も、どのような真実義・真理奥義も、死や苦から救うことは出来ない。火事の前の教説本に等しい。それが何の役に立とうか。むしろ、バケツの水の方がまだ。

実存する哲学、実存する救済が欲しい。

風がそよぎ立つ。いざ生くべし。春の風を名残惜しく慕いつつ、それを哀れな執著と嗤いつつ、慕情に親しみ、敢えて放擲し、手遊ぶ。たはぶれ。僕は立ち上がった。

護岸の砂利の道を歩き、桜並木を抜け、河川を離れて民家と個人商店と雑居ビルとが入り混じる、地方の寂びた市街を歩く。水運で栄えた時期もあつた。むしろ、昔の方が河岸は賑わっていたに違いない。今ではとてもそうとは思えないが、遊郭の跡地もあつた。真堂という書肆の跡地には、今では古い雑居ビルが建っている。

真堂には、洒落本や黄表紙、読み本や滑稽本や人情本などの他にも、絵草紙屋も兼ねていて、旅愁あふれる草紙やら役者の大首絵の揃い物、美人画なども一緒くたに置かれていた。

このような書肆以外にも。貸本屋などもあつて、禁書も密かに置かれていたらしい。お上の取締も、この異郷にあつてはきつくなかつた。

僕は颯爽と歩く。

大小の芝居小屋では、歌舞伎やら浄瑠璃やらが演じられていた。それに伴い、遊郭とつるんだ茶屋の軒も河岸にならぶ。粋な金持ちたちは舟で茶屋に寄せて飲んで食べてから、芝居を見、そのあとは遊郭で遊ぶのである。最後は赤い雪洞ほんぼりの部屋で。

僕はそんな中、文化人の集まった料理店、かずら屋の諸要素を収集し、因縁りてやがて蠢き出す、僕の脳神経細胞内の有機分子の化学反応を観照し、妙な機らしきによって浮かぶ想起のままに任せ、同じく妙な機らしきによって構成される構築を眺め、世界が生誕する、現象の瞬間に立ち会った。

坪庭を鑑賞できる、床の間つきの部屋である。坪庭には牡丹や蹲踞があった。天日が差す。床の間の掛軸には装幀された断簡、寂びた竹節の一輪挿し、曇天の日であったので、気休めでしかないが、行燈の和紙を透した薄ぼんやりした明かりがあった。

俳人や歌舞伎の立作者（座付作家）、絵師もいれば、狂歌師、戯作者もいる。真文藝堂主人、天平喜右衛門が主催した会合だ。酒肴もすすみ、すっかり寛いでいた。そんな満たされた時、しばし起こる沈黙。その時、ざあっと。

「おや、ひと雨来ましたな」

一刹那、苔の匂いが幽かにしたが、すぐに凍えて閉ざされた。

「ちようど良いお湿りだ。ちいとばかり乾いていたからな。好都合だ」

「お湿りというには少々。驟雨というやつですな、これは。それはさておき、いや、ちよいとばかり冷えませんか」

「障子を閉めますか」

「いや、今少し、雨音を聴きたい」

「承知。ところで、あの断簡は」

そう言って、掛軸を指す。

『 龍青無窮是大偉哉』

龍の肯定は窮みなく、大いに偉なるかな。

『 齊天網是无遺漏』

一齊に萬へ及ぶ天網のごとく遺漏がない。

『

「あゝ、ほんとうだ、先般は牧谿が掛かっておりましたが」

「何でもあの天易眞あまやすしんのきわむ之究殿の筆らしい」

「天易：か、古来、天文占星の名家。その本家御当主の作品か。侘び寂びでもなし、風雅でもなし。はてさて、いかがなものかな、喜右衛門さん」

狂歌師、同源無作寂どうげんむさびが揶揄するふうに面白がってそう訊く。

天平は、

「さあ、どうでしょう、無作寂さん。かずら屋さんも想うところもあったのでしようよ、とてもかくても宜しゅうじゃ御座いませんか」

「あっしは味があると思いますかね。こういう場と承知の上で、敢えて外連味を出しているみたいな」

そう言ったのは立作者の天之神爛漫丞。誰も答えられないので、戯作者の平衛鐵舟が話題を換えて、

「そういやあ、江戸の山東京伝が手縄五十日のおとがめだったって話じゃないですか。幕府の横暴、眼に余るねえ。風俗紊乱なんざ、莫迦ぐしい。武家衆に庶民の気持ちがわかるかってんだい。江戸もどうなっちゃうのか」

「酷いもんだね」

「武家だからってこたあないさ。馬琴は旗本の家だし。庶民と権力者、持てる者と持たざる者との対立があるだけさ。お国の対立、民族の対立、習俗の対立、宗旨の対立など、いろいろと言わっしゃるが、なこたあ、全部見せかけで、根源は皆、そこさね。民心一新なんざ、言葉だけの綺麗事、財政の不始末を民衆に押しつけているのさ。金持ちだけが儲かる仕組みはいつの世も変わらないねえ、米を買い占めて値を上げる、だから、一揆や打ち壊しも起こるのさ」

「生活も変わった。地方じゃ筵に寝て、枯れた葦や茅で火を燃やすが、江戸じゃ畳に寝て、薪で火を燃やす。しかも、貧乏しても、どうにか食っていける、飢饉や天災がなけりやあな」

軽く蒸し焼きにして白身はふわっと、皮をぱりっとさせた魚が出された。器は平皿だが、大雑把に釉を塗って焼き締めたもので、無骨な粗い感じが柔らかい白身を浮き立たせている。ちょうど、虎図で、細密に顔料を塗った上に、細い筆で毛の一本一本までも毛を描くも、輪郭は乾き気味の墨で、粗く太く、くっきりと描く時のような効果・風合いに似ていた。

「貨幣経済の弊害だね。古代は自給自足、貨幣経済になりや、金がなくちゃ何も手に入らない。農家ですら米を金で買うようになる」

「それだけじゃねえ、金を貸して利子で稼ぐなんざ、古代にはなかった」

「金を貯めるために、特産品の専売をして商人と藩が利益を独占、しかも、特産品を奨励するから他の産業が廃れて、筵や草鞋まで買う始末。挙げ句の果てには先も言われたように農家が米を買う矛盾」

「意識が変わりましたな。最近は各藩で名産品を必死に創設して専売に勤しむ」

「商家も仲買を通さず、目先の利く村の庄屋と結んで山地の村と直接結ばれようってところもあるらしい」

「流通も世知辛く見直されていますね。大阪の菱垣廻船や樽廻船の正規の流通の隙間を繕う尾州廻船が人気らしい」

「菱垣廻船は遅いし、檻褸いらしいから、江戸に荷を送りたい大阪商人には、いつか見捨てられる定めだったのであろう」

「ご商売は現実が全て。理不尽不明解も回避せず、積極的に処する。事実主義だ」

「商人どもは餓狼のごとしさ。そして又、藩は専売と改鑄で儲けてやがる。しかも、そこへまた、商人どもが絡んで、武家と商家が大儲けさ」

「そう、それでいて、藩が潤えば、民もその恩恵に預かれるはず、両得とか何とか抜かしやがる。農民の直訴など聞きもしねえや」

「貧民の生活を知らぬ奴らの御託だな」

お銚子が廻る。なん度目であろうか。

「生まれながらに良い家に生まれてきた人間に何がわかるもんかね」

「わかりやあしないね、ボンボンやお嬢ちゃんらには」

「神君は凄かったかもしれないが、二世や三世なんてえのは、どいつもこいつもクズさ。世間の苦労ってもんを知らねえ。奴ら皆、廃すべき者という以外の何者でもない。また、そいつらを祭り上げる連中もどうしようもない愚劣、蒙昧、知性の田舎者だ」

「おい、おい、世襲制を否定するか」

「するさ、世継ぎどうのなんぞ、王家だけであるべきだね。臣下の身分に世襲は不要、能力主義であるべきだ」

「そうさね、まあ、世襲も良いところはある。社会が充実していない時代にあつてはな。主人たるに一定の資格・条件を設けることは、無闇な内乱の数を少しでも減らすことに役立つ」

「なるほど。壬申の乱や保元の乱、平治の乱…応仁の乱などが何度でも起きるのを防ぐわけだ」

「さよう」

ぐいっと猪口で呷った。気温は下がり、冷たい風が吹く。障子をしめた。いよいよ薄暗い。左右に春景と秋景を配した六曲一双の金屏風の地の金箔の奥深い沈黙のような雷霆が鈍く底光った。椀ものが運ばれたが、何が入っているかよく見えない。暫時舌鼓の後、

「爛にしますか」

「そうしよう、じゃ、こいつは飲み干すか」

「おっと」

酒をこぼし、袖を濡らした。

「おや、袖ひちて（濡らして）ですな」

それを見て、白舟貫之がそう戯事を言う。

「ふ、お名前のせいかな、紀貫之が気になると見える」

それは古今和歌集の中にある紀貫之の歌であった。

袖ひちてむすびし水のこほれるを 春立けふの風やとくらむ

「袖を濡らし、なんて男女の中みたいだな。むすびし、つてのが、意味深に聞こえる」

「凍った間柄を立春の風が解く、か…」

「清らかな表向きの意味の他に、そういう意味もあるかもな。和歌は不思議だ。多義的で、時には相反する意義をも抱く」

「古今和歌集はね。万葉集のますらおぶりとは少し異なる」

「万葉を素朴と言う者もいるが、むしろ、呪術的だ。道殣（行き倒れの餓死者）を悲しむ歌は怨霊鎮魂の呪術でもある」

「なるほど、非業の死を遂げた者は怨霊化しやすいと信じられていた訳だ」

「美しい風景を読むも、奇しく妙たなるということに霊威を感じて、災いなきように、神を慰撫する意味があるとも言える」

「文字というものが当初は神事のための聖なる象徴、神に願い、又は問うためのものであった」

俳人の彝之四季がしみじみ器を眺め、

「よいお猪口だねえ、口の歪みが偏屈だ。篋使いなんでしょうね。高台に釉の塗られていないところがざらざらしていて、土味がよい。凍えてるねえ。こちらの篋の跡の景色とい、こりゃあまた」

「それで思い出しましたよ」

そう言いながら、天平喜右衛門が懷から開始に包んだものを出した。

箸置きの傍に置かれた器具を見て、彝之が、

「この円環、これは金属製のようだが。青銅か」

「揚子江あたり、古代中国のもの、と言う触れ込みでした」

同源が揶揄気味に、

「また騙されたな、骨董好き」

「蛇？」

彝佐が問う。

「身づからの尾を噛む蛇、の円環ですな」

天平がそう言えば、

「噛まれているのか、噛んでいるのか、いずれか一方でなくばなるまいことは必ず。それは一定」
じつじやう

天之物も問い、天平応えていわく、

「どちらか一方爾焉丈の両方のみだけでしょうね」

「なるほど、言い得て妙。一見無理筋であるが、み仏の自由自在な世界では可能なのである
ろうな」

彝之が腕を組んでそう言いながらうなずくと、同源が半ば冗談調で、

「時空の制限を超えるお話ってえ訳だねえ」

と言う。戲言とは解さぬ平衡は真面目に感心し、

「なるほど、思惟を絶する世界ですな」

それを呵々と笑いながら、

「この世は五蘊の構築ですから、組み直せば良い話です。思考は根底から修正が求められます
ましょうぞ」

天之物がそう言う。

「この世が見たままとは限らぬし。そもそも、思惟を超える自由自在の、絶世界なのかも知れません」

天平はそう言った。

「だから、世界は五蘊で、五蘊は皆空なのではないか」

平衛が言うと、彝之は、

「何であろうと構わぬ、どうでもよいってことだ。とてもかくても候『一言芳談抄』だねえ」

ぐいっと呷った。

見えぬ夕日は沈みきつたらしい。陰翳は深みを増し、宴は和やかに続いた。

豪奢な者もいれば質素に寂枯れたる者もいる。それにも関わらず、いずれも一様に綺羅びやかなる文人たち、俳人の彝之四季、歌舞伎の立作者（座付作家）の天之天真爛漫丞、絵師の平衛飾斎、狂歌師たる同源無作寂、戯作者の彝佐鴨介、真堂主人の天平喜右衛門、彫り師なる白舟貫之の七名であった。

熱い時代である。

彼らはあるりと存在した。明らかな実在であった。むしろ、僕の生の方が希薄だ。彼らの夢が僕なのかも知れない。胡蝶の夢のように。

僕が彼らの創造物で、主体は彼らなのかも知れない。又は僕が彼らを創ったから、時間を遡って彼らが実在したのかも知れない。いや、いや、僕が彼らを創造させられたのかも知れない。創造的行為が受動態で、被創造物が主体なのかもしれない。

現実には現実ではない。すなわち、絶空なので、何があっても、不思議ではない。自由自在であって当然だ。

そんな日々を過ごすも飽いて、ここ数週間は様々に友らと連絡など取るようになっていた。そういう自分の心の機きを興味深く観照する。それも又よし、と。

ある日、僕は親しき仲間と歴史探訪を予定していた。あの七人の子孫たちと。

扱、その日、天候は雨であった。傘を差して巡ることとなるのである。神中洲から出発し、天平薨が案内する予定であった。

丈長のミリタリー系モッズコートを着た僕、天易天耳が難久菰町の駅を降りたのは集合時刻の三十分前、五時半である。自宅の最寄り駅から始発に乗って、ここまで来ていた。

駅を出れば、歩いて十分ほどである。まだ夜でしかない空を見上げる。真っ暗だが、昏い街灯に微かに雨滴が銀に光っていた。

「止みそうもないな」

折りたたみ傘を持参していたが、差さず、フードをかぶった。防水の性能を確認したかったからである。袖を見れば、水を弾いていた。所有物の性能を見るのは楽しいものだ。ウエストの位置が高いスタイルも気に入っていた。

天平菫の従兄弟（天平普薫）が経営する書肆、真文藝堂が集合場所であった。それは神中洲の繁華街の寂れた雑居ビルのならぶ通りの横丁にある。

神中洲はその名のとおり大河の中洲で、舟のような流線形をしており、下流を舳先（船首）とし、上流を艫（船尾）としていた真神郡の入り口であり、防衛の前線であった。東は山地で、外敵は海と平野のある西側から攻めて来たので、この戦艦の舳先を下流と定めているのである。

横丁を少し行くと、真文藝堂の灯が見えた。雨が激しくなる。

室内の暖かさのせいで、窓ガラスの内側が曇っていた。書肆に入ると、彝之阿豆類は既に来ていて、物憂げに菓罐がくつくつと唸るストーブの前に置かれた不釣り合いな安楽椅子に坐っている。菫は古書の目録を広げて何事か説明していた。そこへもう一人、僕のとから、

「こんにちは、お邪魔します」

彝佐浄土である。旧ソビエト軍のポンチョ・マントを着ていた。彼が着るとどこことなく修道僧に見える。車の停止する音がした。

「鶯と炙紗だ」

狭い横丁の道幅いっぱいになりそうな角目四灯の1979年製ダッジバンだ。エクステリアもインテリアはカスタマイズされて豪華な八人乗りであった。ペルシアの我が儘な美姫が宴の余興で使うためにわざわざ贅を凝らして作らせた、獅子に牽かせる黄金の戦車のようでもある。

「お待たせー」

まっすぐな長い黒髪に雪のように色白でしなやかな細腕の白舟鶯がハンドルを片手に手を振っていた。

助手席には青白くて凜とした、おかっぱの、細いと言うよりは針金のオヴジェのような感じの平衡炙紗がいる。目鼻立ちのはっきりした癪の強そうな顔であった。鶯が痩せてい

るのにまろやかな柔らかさを感じさせるのに反し、尖っていて、強靱さを奥に内蔵していることを感じさせる。

操縦席と助手席の後ろ、四列シートの上二列目には、くしゃくしゃな金髪のショートヘアで、チェリーのように突き出たピンクの唇、ぶっきらぼうな同源狂歌が破れたロングTシャツとリーヴアイスの脚を組んで坐っていた。

その隣の天之ややこは緑がかった銀で長めのマッシュルーム・カットのようなボブで、前を切り揃えて眉を隠し、鬢削ぎの姫カットふうにしていた。僕らも含め、全員二十七歳。ザ・トゥエンティセブン・クラブだ。

「女子は待ち合わせて来たのか」

僕が言うと、豊は、

「そう言う予定だったわけでもないんだけどね、この天気だから、鶯が気を利かせて彼女らに声を掛けたいらしいよ」

「じゃ、行くか」

阿弔類がおもむろに立ち上がる。トレンチを羽織った。豊も丁寧に目録をしまい、インパネコートを手にする。

雨の滴に打たれながら、アメ車に乗り込むのだが、右側の三枚ドアから乗り込むので、ぐるりと回らなければならなかった。左側には操縦席のドアしかない。傘を差すかまでもないと走ったが、いや、濡れた。阿弔類、豊、僕、浄土の順で乗ったが、僕と浄土はかなりぐつしりである。三列目に坐った阿弔類と豊の間を通過して、四列目に坐った。ともかく落ち着いた。

「じゃ、行くわよ」

最初は神中洲の舳先にある青龍神社だ。実はこの郡に青龍と名のつく神社や寺は多く、真神は古くから青龍を神と崇めていた。三台しか停められない駐車場の二台分を占め、

「平気よ、こんな平日の雨の朝に、車で来なきゃならないような距離のある場所に住む人は誰も来やしないわ。近所の人に来るのがせいぜい」

鶯はそう言い切った。まなじりも涼やかな、淑やかに見える黒眼がちの双眸からは全く想像もできない言葉だ。

雨は相変わらずだった。止む気配もない。

「やれ、やれ」

豊が先に降りた。身づから買って出た案内役だから仕方がない。

鶯は細い体が折れそうなくらい重そうな羊革製（内側は羊毛）のフライト・ジャケットを着て降りた。

「獣脂（ミンク・オイル）をたっぷり塗布して来たわ」

天之ややこはダッフル・コートを羽織る。金髪の狂歌はスチームパンク・コートを颯爽と纏った。炙紗は登山用のゴアテック・アウターを着ている。

降りた順に次々、赤や緑や青やオレンジや黄色や紫や黒の傘を差した。僕の傘は特注で半径〇・八m、深く蓋うようなかたちで、大袈裟に言えば、家のように感じた。

「じゃ、いいかな。行くよ」

短い石段を登る。傘から落ちる滴が数珠繋ぎであった。歩む順は、蕨、阿弓類、鶯、炙紗、狂歌、ややこ、浄土、僕だ。傘をぶつけ合うように、鳥居をくぐった。

「鳥居と言っても、まるで中華街の門のようだろ？ 色彩豊かで装飾があり、屋根がついている。黄や赤や青があざやかだ。龍の浮き彫りもある。中華街というよりは東照宮の陽明門の方が近いかもしれない」

「知ってるよ」

ぞんざいに、狂歌が言った。

竜首の手水で漱^{くちすす}ぎ、手を清める。玉砂利の敷かれた道を進み、注連縄の神木の傍を過ぎった。青い石が所々突き出ている。神明造の本殿の前に簡素な拝殿を持つ社が見えていた。高床の本殿がすぐ見える簡素な造りである。

二礼二拍手一礼。拝殿や本殿の裏に回って、舳先へ進む。犀の角のように石が立っていた。腰の高さくらいだ。少し青みがかった。いた。

「これさ」

蕨が言う。

「ほう、これかい？ ふうん」

阿弓類が片手を膝に当てて腕で上半身を支えるように腰をかがめ、見入った。鶯と炙紗がその背後から覗く。狂歌とややこは左右の斜め後ろから首を伸ばした。傘があるので、僕と浄土はお手上げ、待つしかない。

「あ、いいよ、見て、見て」

鶯が譲ってくれた。すると、炙紗も気づいて、

「あ、ごめん、忘れてたよ、どうぞ」

「じゃ、有り難く」

浄土が言った。僕も見た。

右卍が彫られている。

だが、普通の卍ではない。縦棒は青、横の棒は赤に彩色されていた。青と赤の十文字の先端につく線は通常直線だが、湾曲し、弧を描いていた。それゆえに円にも見える。円環の中に十字があるように見えた。巴に似ている。巴と言えば、普通は勾玉状のかたちのものが三つ、又は二つ、渦巻くかのように組まれたさまだが、この右卍は勾玉が四つある巴のように見えた。

しかも、右卍なので、通常の巴とは逆回転の巴を成している。

葦は言った、

「赤の横棒と、青の縦棒が基礎になっている。その四方の先端は鎌のように弧を描いている。」

濃く鮮やかな青の太い縦の棒Ⅰは『肯』を顕す。

古くは柱状の石を立てたもので崇拜されていた。

龍肯を表現する真神文字『𐤎』（あい）はこれに由来する。濃く鮮やかな緋色の太い横棒Ⅱは『非』を顕し、縦棒と交差して、全網羅を表す。背反する一切全てをすらも網羅して遺漏がない、違背異叛がない、完全無欠な全宇宙であるという意味だ。円環であるというところがそれを明晰に補い、強調する。この意匠は『燦々たる太陽の龍肯』を表し、最強の神兵器とされた。これが神の舟なる神中洲のいわれだ。

どうかね、諸君」

僕らを見渡す姿は講義する教授のようでもあり、又、民衆を睥睨する皇帝のようでもあり、崇高でありつつも、滑稽であった。

「ひゅう、やばいわ」

軽口を言ってから、狂歌はつぶやくように小声で般若波羅蜜多心経の真咒を誦す。そして、笑う。パンクな風体だが、家は貞観正國寺に関係する家系で、本家が代々住職を継いでいた。そういうことだ。ちなみに彼女の家は分家の末端であった。

阿弓類が腕を組み、

「最前衛に最強を置いたってことか。我らが真神族にとっては、真理こそが兵器だ。まさにその実践という訳か」

「そういうことだ。ちなみに、この聖なる象徴は五万年以上も前から使われていたと言われている」

真神族が日本へ涉って王朝を建てたのは真神暦七千三百六十七年の戊辰年甲寅月朔（紀元前七百十三年一月一日）である。時の王は神かむい彝や彌ま眞ま斗とであった。その上陸地が真神郡である。始祖から数えて第三六六代目であった。初代は国家の礎を築いた彝い玖く邇に王である。紀元前八千年前に遡った。

民族の起源はさらに古い。

その発祥は紀元前五万四千年以前に遡った（古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前一万二千年頃と言われる）。文献資料のみで、長い間、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのナミブ砂漠の洞窟で真神文字が発見され、その顔料に使われた植物の分布年代と、生贄と思われる動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認されたのである。

その文字の中に、この特殊な𐤎もあった。𐤎（龍肯）の文字も。

ちなみに、ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり、ナミブとは、その地域に住む人（サン人）の言葉で、「何も無い」という意味である。サン人は遺伝子解析の結果、人類の祖先、最古の人類とされている。

真神族はその後、紀元前一万八千年頃から牧畜を始め、紀元前一万四千年頃に農耕を始めた（古代エジプト人ですら牧畜が紀元前一万年頃、農耕が紀元前八千年頃）。

農耕作業は独りで行うよりも、集団で行う方が効率良い。一人の仕事が一だとしても、十人の仕事は十ではなかった。十五であり、時には二十でもある。百ならば、三百や四百かもしれない。たった。

その理を覚り、真神族は集団をなし、集団が大きくなれば大きくなるほど、余剰を生むことを知る。灌漑や貯水などの土木の技術や、種蒔きや刈り取りの時期を掌理し、経営するための天文学が発達した。

又、人口の多さは軍力をも保証する。

例えば、古代エジプト王国においても、肥沃な広い土地と、ナイル川の水とアフリカの日光とに恵まれたため、巨大な農業国家となり、大人口を支え、周囲の国に対し、圧倒的な人口差を

誇り、巨大な軍隊を編成した。彼らは兵士らは縦に百人、横に百人をならべ、一万人方陣を以て他国の軍隊を踏み潰したのである。

扱、真神に話を戻そう。斐園良之都紀元前六千年、彝久那斗王、戸瑠兔邇栖紀元前四千五百年紀元前八千年頃（真神神統記に扱る真神元年、西暦で言えば紀元前8079年）、遂に王国が建つ。

真神族の古来最高神カムイアレザ神彝亞咽厨御の真義に還るべく、世界を真実の世界へと戻すべく、暗黒と無慈悲と無明の激流に筏を泛べ、棹を差すように、心機を以て、世界を建築すべく魂を滾らせる、彝玖邇いくにという偉大なる王が現れ、真神之国を建国した（古代エジプトで集落を作り始めるのが紀元前五千年頃とされる。その原始王時代はさらに紀元前四千二百年以降のことだ）。なお、真神之国の場所は特定されていないが、一説には、現在のチャド共和国、もしくは中央アフリカ共和国あたりと言われている。

日本海を渡って、その聖なる山をも見つける。それが真神郡の真神山である。

時代が下ると、東夷として大和朝廷の征伐の対象となつた。巨万の富を狙うものであつた。やがて朝貢する關係となる。源平合戦の時代や戦国時代に幾度か苦難を迎えるが、頼朝や家康の時代は特に過酷であつた。思うに、日本の理不尽なまでに苛烈な管理社会は武家の時代に始まつたのではないだろうか。

江戸幕府の施策は屈辱的でもあった。百貫の金塊を毎年納めるというのはよしとしても、言語や文字の禁止、文物の焼却、聖地真神山の封印は民族の尊厳を毀損した。理由は、怪しげな靈威で、都の帝の神徳を曇らせたというものであった。

已むを得ず、眞神の王家はその時代、古代に支城として使っていた尖刀石山ひたすらという、大岩を積み木のように積んだ砦に、屋敷を構え、町を作り、一万年来の戒めを護つて只管時節を待った。

※後註 1 太祖イージュ

初代王彥玖邇の祖先。紀元前五万四千年前に真神族をまとめたという伝説上の族長。巨軀で

獅子十頭を屠り、巨象を素手で斃したという。神彝亞咽厨御の末裔であるという。

※後註2

存在者Ⅱありとあらゆる・なきとなかゆる（そういう日本語はないが）及びそれら以外的一切。当然、時空や抽象概念も含む。

『存在者について問われ、ソロン教授はこう答えた。

「人・獣類・禽類・爬虫類・両生類・虫類・ユーグレナ藻など・ミトコンドリア・アメーバ・草木・水・火・土・岩・金属・天・海・空気・星・月・太陽・宇宙・光・闇・時間・空間・非存在・無空、それらの超越、又それら以外のもの、及び概念にないもの一切、併せてそれら以外のもの、ならびに……」

ゾルゲ卿は顔を顰めたが、何も言わなかった。（『眞義塾沿革史』より抜粋）

※後註3 『原蛇の偈頌』意識

ウロボロス ガーター

『聖なる原蛇の環よ、自分の尾を咬む蛇は喰らうのか喰らわれているのか。

捉え（理解し）ても、捉えられ（理解でき）ない真の真理がそれに似ている。

なぜなら、人も獣も禽も爬虫類も両生類も虫もミドリムシもミトコンドリアもアメーバも草木も水も土も岩も金属も火も海も天も空気も星も月も太陽も宇宙も光も闇も時も空間も無空もそれら以外もその超越者であっても、一切の存在者がそれを捉え（理解し）ているから。それが真の真理である。しかし、そのような捉え（理解）は捉えている（理解している）と言えるものがあり得るであろうか。この問いには答のあり方すらもない。それすらも言えないのかも。この真理は、もし我々の観ている一切が観るとおり、認知しているとおりと全く異なるとしても、一切変わらない。

だからこそ 人は堂々と果敢に行動すべきである 義しいとおもいうことをなすしかない』

白虎神社、旅籠跡、贅家の石垣、裂の森、火々禽の柵（城）古戦場、真神山の彝龍の裂。

天平薨、彝之阿弓類、白舟鶯、彝佐浄土、平衛炙紗、同源狂歌、天之ややこ、天易天耳

1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0